解題

森下正明

一九四〇年に書かれ、一九四一年に出版された「生物の世界」の序文に今西さんは「この小著を私は科学論文あるいは科学書のつもりで書いたのではない。それはそこから私の科学論文が生れ出ずるべき源泉であり、その意味でそれは私自身であり、私の自画像である」と述べている。そして事実この本にもりこまれた今西さんの自然観や思想は、戦後にいたって次々と世に出された今西さんのすぐれた科学論文や科学書の源泉とも母胎ともなっているのである。本巻に収められた「生物社会の論理」(一九四九年)もその一つである。

たしかに「生物社会の論理」は「生物の世界」の自然観を具体的な資料で裏付けしつつ、さらにその思想を発展させているという点では「生物の世界」を母胎として生み出された科学書である。しかし別の見方をすれば、「生物の世界」が生み出されたのは、その時点において今西さんの頭の中で、すでに「生物社会の論理」の、少なくともその前半が書き上げられていたことになるのではないか。「生物の世界」の本題にも当る「社会について」の一章は、まさにその時までの「論理」の到達点の素描である。そして現実に世に現われ

た「論理」の中で今西さんは、どのような経路をたどってその到達点にいたったかを、その内容構成の順序によってわれわれに示してくれているのである。したがって「論理」はいわば今西さんの生物的自然探究の歴史の書であり、別の云い方をすれば今西さんの自然認識の発展の叙述でもある。「生物の世界」が今西さんの自画像ならば、「論理」は今西さんの自叙伝の一章ということができるのではないか。

ところで「論理」ができ上るまでの今西さんの思想的発展の経緯は、その「再版へのあとがき」において、今西さん自身によってすでに要領よくまとめられているのである。これはまさしく自叙伝の要約である。こうなると「論理」の由来や背景などについて、私があらためて解説すべきことは、もはや何一つ残っていないように思われる。とはいえ、解題者に指名されながら何も書かないでこれで終りというのでは、いささか無責任の感をまぬがれないので、戦前の今西さんとの接触の日々を思い起しつつ、その思い出と結びついたこの今西さんの自叙伝に、蛇足ながらいく分の注釈をつけ加えて責を果すことにする。

私が今西さんを知ったのは、一九三三年私が京大農学部の二回生として昆虫を専攻することになってからである。今西さんはこの時すでに理学部に移ってはいたが、農学部の方にも嘱託として籍が残っており、昆虫研究室に時々その姿を見せていた。私たち新入りがはじめて研究室に出頭した時、今西さんは部屋にいなかったけれども、他の先輩からここ

が今西さんの席だと教えてもらったその机上の本棚につめられているのは、すべて地理学と植物学の本ばかりで、昆虫研究室の名にふさわしい昆虫の本などは一冊も見当らなかったのには、開いた口がふさがらなかったものである。

一九三三年といえば、今西さんがカゲロウ幼虫四種について、渓流の緩流部から急流部にかけての棲みわけ現象にはじめて気がついた年であることを、今西さんは後に書いている。しかしたまたまアリの垂直分布に手をつけかけていたその頃の私は、今西さんのカゲロウの仕事よりも、同じ年に続けざまに出された「分布の研究方法」、「ドリアス植物群」、「ケッペンの気候型と本邦森林植物帯との垂直分布に於ける関係に就いて」などの論文を、絶好の道しるべとしてむさぼり読み、それによって今西さんの書棚の本の種類をとおしてかいま見ていたその学問の広さと深さに、あらためてすっかり傾倒させられたのである。とりわけ「分布の研究方法」（本巻所載）は、区系地理学的な分布境界線問題一辺倒のわが国の動物地理学に、はじめて生態地理学としての進路を示した珠玉の作品である。それは私ばかりでなく、少なくとも区系地理学にあきたらなさを感じていたすべての分布研究者にとって、指導書ともなったことと思われる。終戦時ボルネオで消息を絶ったままになっているすぐれた地理学者の鹿野忠雄氏が、かつて私たちとの会談の折、「私も今西さんの『分布の研究方法について』を折にふれ読み返しては、そこからいろいろと教えられています」と語ったことを今でも私はおぼえている。

「分布の研究方法について」に示されている考えは、今西さんにとってもその後の生物社会構造論建設の土台に当るものであった。分類と種の生態の知識に精通することによって、環境と結びついた種の分布のひろがりをとらえなければならぬというこの文中の主張を、今西さんはみずから実践することによって、「生物社会の論理」へいたる道を開拓したのである。

一九三三年も終りに近いある日、今西さんは昆虫研究室の大部屋にたむろしていた岩田久二雄さん、可児藤吉さんをはじめわれわれ若者どもを集めて一つの調査計画を提案した。それは川原、河辺林、クヌギ林や松林、常緑広葉樹林など各種植生地における動物群集の一年を通じての調査である。地域は京都近郊の西賀茂がえらばれ、毎月一回一〇メートル方形区法による定量調査は一九四〇年一月から十二月まで大部屋全員の参加の下に実行に移された。これはわが国では今まで行われたことのなかった多人数のチーム・ワークによる群集調査であった。この計画に当っての今西さんの頭の中には、あるいはクレメンツ流の遷移の各段階に応じた動物群集の把握といった考え方があったのかもしれない。しかし見落すことができないのは、この時の今西さんの資料整理の方法であって、それはその後のこの種の調査に時として採用されるような鱗翅類幼虫とか、クモ類とかいった分類群をはじめから一括して仕分けるという安易な方法をとらず、はじめから種分けの作業を行ったことである。多くの幼虫を含む群集構成員のそれぞれの種名を、正確に同定すること

はもちろん、かりの名をつけての仕分けでさえも容易ならぬ作業である。この困難の道をあえてえらんだのは、生物群集は種の重複相に他ならず、各種社会が地域的にも環境的にもどれだけの範囲にひろがっているかを知ることこそ生物社会を把握するための基本であるという、「生物群聚と生物社会」（一九三六年、本巻所載）の考え方が、この時すでにでき上っていたことを示すものであろう。そして同時に、季節的な棲みわけを代表させるにたりる指標動物を見出すための努力のあらわれでもあったと思われる。あとの問題に関しては、方形区調査の他に、目にふれ易いチョウやトンボについて、調査地点間のルートに沿ってのセンサスをも今西さんは同時に行っているのである。

今西さんがまだ大学生の時に書いた、「芹生峠附近」という一文がある。私は学生時代にこの文章を読み、今西さんの京都北山への愛情にすっかりうたれたが、その文章の中に次の一節がある。

「芹生峠を越えると丹波路である。丹波と云ふ国が子供心にどんなに画かれてゐたか。丹波には狼がゐる。丹波には山蛭がゐる。丹波には大きな〳〵スズメバチがゐる。丹波には裏が一面金色に輝くシジミテフがゐる。そんな話をきくと加茂川の水が無くなる処まで行つてあそこに見える山を越え、そのまだ奥に続く山の丹波へ行つてみたい。その願ひが始めて実現された時、始めて芹生峠を越した時の楽しい思ひ出、道ばたに咲いた一もとの花にも胸躍らせつゝ歩んだことであつたらう。」

少年の頃から、山への憧れが同時にそこにすむ生物への憧れでもあった今西さんが、長じて登山家として、生物学者として、また地理学者としての道を歩もうとする時、カゲロウ類にかぎらず山の動物の分布の問題はその研究歴の最初からの関心事であった。「蟻に見らるる垂直分布の例」(一九三〇年)や「分布の研究方法」の中に出てくるエゾハルゼミとハルゼミの棲みわけ(ここではまだ棲みわけという言葉は使われていないが)の観察などはその一断片である。しかし動物の垂直分布の調査を綿密に行おうとする研究者にとっての悩みの種は、比較の基準とすべき植物の垂直分布帯のあいまいさである。ここで今西さんはみずからこの問題を解決しようと取りかかる。それは今までの針葉樹林とか落葉広葉樹林とかの景観的な、あるいは群集学的な分け方を捨てて、種ごとの分布をしらべ、その中から分布帯区分の指標となるべき種をえらび出すことによって、分布帯そのものを明確にしようとするものである。これはカゲロウでみつけた棲みわけ現象の植物への適用であるが、それとともに、このような指標生物による地域区分の考え方はすでに「分布の研究方法」の中にも示されていることは注意する必要があろう。そしてこれらの研究をとおして一貫している理念は、種社会こそ生物社会構成の基本単位だということである。こうして行われた分布帯区分のみごとな成果を、われわれは「垂直分布帯の別ち方について」(一九三六年)に見ることができる。

ここで一言述べておく必要があるのは、「棲みわけ」現象の発見は、「棲みわけ原理」の

確立のための最も重要な第一歩であることはまちがいないにしても、「現象」が「原理」にまで高められるためには、その間にもう一つ重要な概念によって媒介されることが必要であった。

それは「生活形」という概念であった。今西さんが論文の中で正式に生活形という語を用い、これをその理論体系の重要な柱にしたのは、一九三六年に書かれた「生物群聚と生物社会」からである。ここで正式にといったのは、たとい生活形という言葉を持ち出してはいなかったにせよ、今西さんの仕事の中では、その概念の内容が、その理論建設に対して実質的の役割りを果しつつあったからである。垂直分布帯の研究では、森林を構成する多数の植物のうち、樹木という生活形をもったものだけがえらび出され、この同じ生活形に属する種類の間の分布が比較されている。カゲロウ幼虫で今西さんが最初に気がついた棲みわけ現象というのも、実は大礫の上に生活する同じ生活形の種類の間の関係であった。生活形のもつ意味を意識した時、今西さんの社会構造論には一段の深みができる。それまでは種社会の積み重ねとして比較的単純に考えられていた全体社会の構造が、生活形を橋渡しとすることによって、より現実的な、より具体的な構造としてとらえられ、ここから新らしい分析の道が拓かれたのである。「群聚分類と群聚分析」(一九三七年、本巻所載)はこの段階への到達を示す作品である。

しかし「群聚分類と群聚分析」に取上げられた対象は、生物社会とは書かれていても実

際の例としては植物社会だけが挙げられている。これはいうまでもなく植物の生活形社会層が景観的にもとらえ易いということとともに、一方、動物の生活形の把握が容易でないという事情の反映でもあろう。もちろん大哺乳類や昆虫類といった大まかな生活形分析だけならば、問題はないところだろうが、少なくとも層内の各種が棲みわけ関係で結ばれているような生活形社会層は、一体どのような原理によって見出すことができるのか。「生活形とは形態をとおして見た生物の生活様式」という定義の表面だけを見ていたのでは、この答は容易には出てこないであろう。

正直なところ、この問題に対して今西さんがどれだけの苦心を払ったか私には分らない。しかしやがて今西さんは、生活様式の内容は生活の場をとおして理解すべきであるということ、そしてそれによってはじめて社会構造をなり立たせる原理となり得ることを悟るにいたる。「生活の場をとおして」という一見何の変哲もないこの一語の奥に、今西さんの生態学者としての長い自然探究の経験の中から、ようやくにじみ出ることができたエッセンスともいうべきものを、私は味わうのである。

このように生活様式を生活の場をとおして把握するということは、生活の場がちがえば生活様式もまたちがってくるべきだということの理解でもある。生活様式というひと筋縄ではとらえがたいものを、その生物の形態とその生物の生活の場をとおして把握したとき、その生活様式がすなわち生活形である。こうして今西さんはカゲロウ幼虫の生活の場の分

析をとおしての生活形分析に成功し、さらに一般的な生物社会構造論、すなわち生物的自然の構造は具体的な社会単位である種のうち、いくつかの類縁的形態的に相似た種が、相似た生活の場を棲みわけることにより、一つの生活形社会——同位社会——を構成すること、そして相似た生活形社会同士はさらに生活史のずれなどを通して同一地域に重複することによって複合同位社会を構成するといった包括的な理論を確立する。この理論は今西さんの学位論文としてまとめられ一九三八年および一九四一年に英文で発表され、後に「生物の世界」の「社会について」の章の骨組みとなったものである。「生物社会の論理」の前半においては、このような理論構成にいたるすじ道が、それぞれの理論段階での具体的資料とともに述べられている。

今西さんにしたがって歩んできた日々を思い出しながらまとまりもなく書いているうちに、予定の紙数を大分越えそうになってきた。少し先を急ごう。生物社会構造論としては重要な地位を占める問題でありながら、実は「生物の世界」の中で触れられないままになっていたものがある。流速に応じたカゲロウの棲みわけのように小地域的な棲みわけと、垂直分布帯に見られる大地域的な棲みわけとの関係である。「生物社会の論理」の中の「同位社会の二系列」から「記述における縮尺度」にいたる論述はこれに対する答えである。ただし「二系列」については、一九四一年の英文論文ですでに論じられ、「縮尺論」の考え方は「草原行」(一九四七年)の中にすでに示されていることを注意しておこう。

「生物の世界」が書かれてから、「論理」の執筆にいたるまでの間に、今西さんは三回の海外調査を行った。一九四一年のポナペ島、四二年の大興安嶺、および四四～四五年のモンゴリア調査である。これらの調査旅行は、今西さんにとっては、それまでに体系づけられていた社会構造論を、もっと大きい視野から見直し、そこから更に新らしい理論的発展をもたらす機縁ともなった。これらの成果の一つ一つについては、ここでくだくだしい注釈を加えなくても「論理」の後半を一読するだけでその概要は汲みとることができるであろう。立論の根拠についての詳細を知りたい読者に対しては、「ポナペ島――生態学的研究――」(一九四四年)、「大興安嶺探検」(一九五二年)をおすすめしよう。このうち「ポナペ島」においては、棲みわけ理論によるクレメンツ説批判がはじめて登場し、後の地球規模の生態系構造論への発展の土台となり、「大興安嶺探検」は、このような大規模構造の具体像をえがき出すための足がかりとなった。本巻所載の「F・E・クレメンツ――その学説の批判」および、「内蒙古草原の類型づけ」、「内蒙古草原の地理的位置づけ」は右にのべたそれぞれの発展における踏段の役割りを果しているものと考えてよかろう。

このようにしてカゲロウの棲みわけの観察から出発した今西さんの理論は、休みない発展成長をつづけることによって、遂に全地球的生物社会構造論の展開を見るまでに至った。そしてこれはまた本巻所載の「生物地理学とその学派」において今西さんが提出した問題、すなわち「ある種の生物がある地域に分布して、そこに生物分布帯なり地域共同体なりを

現出しているという否定できない事実を理論づけてゆくのは、古典派、生物分布帯派、生態学派のいずれであろうか」という問いかけに対して、今西さん自らが理論づけを行うことによって回答したものといえる。それは三学派を統一しながらこれらを超えた今西学においてはじめて行い得るものであった。

本巻の「論理をめぐる諸論文」のうち、今まで触れなかったものについても、少しばかり述べておかねばなるまい。「生活共同体の認め方」はモンゴリアにおいて、人間をも含めた「草原共同体」を対象とした「総合生態学」の樹立を構想した今西さんが、その総合生態学的研究の序文的論文として書いたものと思われる。そして前記草原類型に関する二論文は、直接的にはその研究の基礎としての植物的自然の展望を目ざしたものであったにちがいない。「草原共同体」の総合生態学的研究は、終戦のため中絶したが、その構想の基本は今日アフリカにおいて生かされつつある。

今西さんの生物社会構造論は、社会構造としてあらわされた自然の秩序の認識である。これによつて示されているのは、それぞれの生物が、それぞれ収まるべき位置に収まった調和のとれた世界像である。このとらえ方が静的にすぎるという批判に対しての今西さんの答えは「再版へのあとがき」にのべられている。

この解題では、私は今西さんの理論形成の過程での、科学的側面にだけ目を向けすぎた

ようである。今西さんの自然観のように、科学的理論と哲学的世界観とが渾然一体となって発展してきているものを、本当に理解しようとするならば、もっと根源的に、今西さんの人間そのものにまで掘り下げることが必要だろうが、今の私には、残念ながらその暇もその力もない。ただ一つ云えるのは、今西さんの論文や著書の一つ一つのなかにさえ、第一巻の解題のなかで梅棹さんがもちいた言葉の「特殊美学」が感じられることである。そしてこれとともに思い浮べるのは、理論づくりがうまく成功しないときの今西さんの口ぐせともいえる「もひとつすっきりせん」という云い方である。愛する自然を「すっきりした」姿で把握したいという、いわば美を追求する心が、今西さんを執拗なまでに自然探求の道へかりたてる原動力となっているのでもあろうか。